Title	北村みな書簡 : 櫻井成明宛・明治 27 年 11 月 7 日付
Author(s)	川崎, 司
Citation	聖学院大学論叢, 12(2): 83-103
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=518
Rights	

聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

北村みな書簡

——櫻井成明(なりあきら)宛・明治27年11月7日付——

川崎　司

A Letter of Mina KITAMURA Addressed to Nariakira SAKURAI

Tsukasa KAWASAKI

In the fall of 1998 I received a letter written by Mina KITAMURA (1865-1942) addressed to Narihiro SAKURAI (1865-1945) from the Sakurai family. It was dated November 7, the 27th year of Meiji (1894).

Mina was the better half of Tôkoku KITAMURA (1868-1894), a famous literary man in the Meiji era.

The "Pessimistic Poet" (Tôkoku) and the "Samurai Christian" (Nariakira) had cultivated a strong friendship and had become bosom friends in 1889.

Tôkoku became disgusted with existence and committed suicide on May 16, 1894. Half a year later Mina confided in Nariakira. The letter is full of Tôkoku's agony and Mina's grief.

去年の秋，櫻井まつ子様（櫻井成明ご長男・故成廣氏夫人）から，北村透谷の妻・みな（以下「美那子」と記す）の書簡が届けられ，驚きと喜びと感謝の思いにつつまれた。

半紙2枚の境域には，愛する夫を喪って半年後の美那子の"非常なるかなしみ"が，また彼此の岸にさまよう透谷の"病中のくるしみ（心の困）"が，透谷〈二なきの友〉※・櫻井成明（号明石(めいせき) 1865～1945）に真実の筆をもって打ち明かされている。

※「〔要目〕追憶，北村透谷」巌本善治『評論』M27. 10. 8

Key words; Married Love, Parental Affection, Warm Friendship, Torture of a Widow, Pathos of a Poet

（1）

24.5cm×33.4cm　墨書，半紙２枚

其後ハ心の外御ふさたに打過き居御高許被下度候扨何より申上て
宜敷やら先貴君御近状如何被為入候哉伺度候去年の秋国府津①
にて御見送り致せし節ハ夢にも思はさりし我等今日の有
様にいたらんとハ一人ハ天のうるハしき園に遊ひ一人とわすれかたみハ
罪のほろびぬにやいまた地にありて困しみ居り候
度々の御芳玉又評論②に御記載の御文等も拝見ハ致し候へとも一言
たに不申上定めし御立腹の事と恐入候其頃ハ私に付き非常
なるかなしみのうへに又再ひなけきに逢んかの恐レありてとなた様
ニも心になき失礼致し居候所只今のところニてハ
太田君③の御週旋により本月一日よりペンロット嬢④と申洋人に
日本語を御をしへ申事ニ相成芝区三田小山町三十七番地
江口様邸内に少娘とも同住致し傍ら伝道に従事致し居候
乍憚一身上に付きてハ御案事被下間敷併しなから何卒
たのみなき我等を御たすけ被下度呉々願上候岩本先生も種々
御心配被下候へとも透谷在世中御依頼申せしことも有之とにかく
太田君に御まかせ申置漸く安心を得候同君ハ今夜当地を去て
奥州に趣かれ本年末頃御帰京の筈と承り候
英子も日増に成人いたしものもよくいひ誠に丈婦に御さ候
森又ハさもしき所を見てハあれハ（チツチヤン）父の家かとたつね
候ニハほと〳〵堪へ難く候父ハととへハ箱の中にねむりてあり或ハ仏壇を
さしてあそこにゐますと答ふ心なきものなから声もひくく父を
拝すといゝてハ諸手を合せて念するなと目もあてられぬことに御さ候⑤
とりちらしたる書きものも諸信友の手により一ツの遺稿⑥に迄なりたるハ
感謝の至りに御さ候蝶のうた⑦に付き病中ニいへることありきそハ
三ツト云ことハあまりよくないと西洋人ハ申とか実に透谷の死ハ夢より
夢に入りたりと申すも猶不可なき如し
去年十一月三日英子の病気療治のため上京⑧致し国府津をあとに
してより大学病院に通ふ便利と家族のためとて私ハ弓町
えまゐり居り透谷ひとり弥左衛門町二階にあり尤其前より非常なる
不平⑨を心底にかもしたりしがおひ〳〵小弟⑩の為行につき楽し

（2）

[illegible]

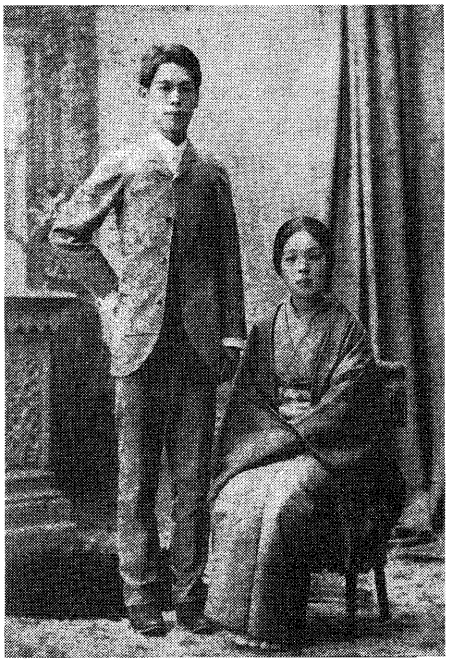
[illegible]

[illegible]

からぬこと多く今般岩本氏と星野兄ニ付而の不平[11]あり大本原ハ
家族の不平より出たりと想はれ候委細認め初めたれともいろ〳〵込入
おり候故拝眉のうへならてハ申上兼候十二月廿三日夜一度剣を抜き
て自殺を試みし[12]よりそのきづのいゆる迄十二三日の間ハ全くの透
谷なりしかそれよりハ神経或ハ乱れ或ハさわやかにもなりて東京
病院瀬脇氏[13]の治療ハその甲斐なく芝公園の庵に反りて
病を重うする原となり[14]月と共に天ニ遊ふの外心に楽しみ
なき厭世家[15]となりさしもかなしき終りをとけたる次第ニ御さ候
妹の心中只彼時の有様と其前日のあわれなる言葉と病中の
くるしみ（心の困）とのみ申外ニありて楽しき日とてハ一日もなく
只彼を知り彼を語る方々のみなつかしくせめておのれのつみと
不貞なりしを語りざんげして日を送ること楽しく御さ候英を
愛する愛[16]ハ死する夜迄かわらさりし親たるつとめを尽くさぬこの
父を免るせとひれふしてハ少女ニ詫たり[17]願くハ伝道師[18]となりて家
族（私と英）のためニせんと幾度かいひたりしが全く神経乱れたりとも
覚えぬと此終ニハとても生きてハいられぬ故お前も一所ニ死ねよと毎日〳〵
それのみすゝめられたり[19]そハ私一人いきてゐても英と同住することハとても
むつかしいつそ死する方まされりと只々我等両人のうへのみ案事ゐたりし
二三日前（死する）巌本兄より御手玉来り種々透谷ニつき御週旋被下ことに
私ニ付きて一方ならす心配してゐるとの一文ありそれを見てより少しく安心せ
し様子見ゆ而して決心せしならんと考へられ候
病前より病中の事ハいつれ御めもしニてゆる〳〵御咄し申上度あまり〳〵
御無沙汰ニ打過たるゆへ右申上候間も文も迫らす半読被下度
願上候
透谷の死[20]ニ付きてハ義母のうらみ悉皆に妹の上ニアリ然レトモ妹ハ掛念せす
只彼か在世中くるしみニ困しみ，漸く自己の欲する道に進みかけて
其業或其希望を達せざりしを悲しむのみニ御さ候其外ニ於ハ
世間ニ私の如き場合ニあるものハ数多からん英の如き不幸のものも
其類あるならんとせんかたなくあきらむる様いたし居候祖父母の英を
愛する甚に深く御さ候今英ハ戸主[21]となれりしかしなから
たとひ戸主ニても母か他へ嫁さぬ中ハ母と同住する事ハ不適当ニハ有之間敷
候や或ハ母より離れて家ニあるへき乎伺上度候職業ある身[22]となりなから猶
昨年のことのみ是彼うかみ心の中御察しを願ふのみ余ハ後便ニ申上候
あら〳〵かしく

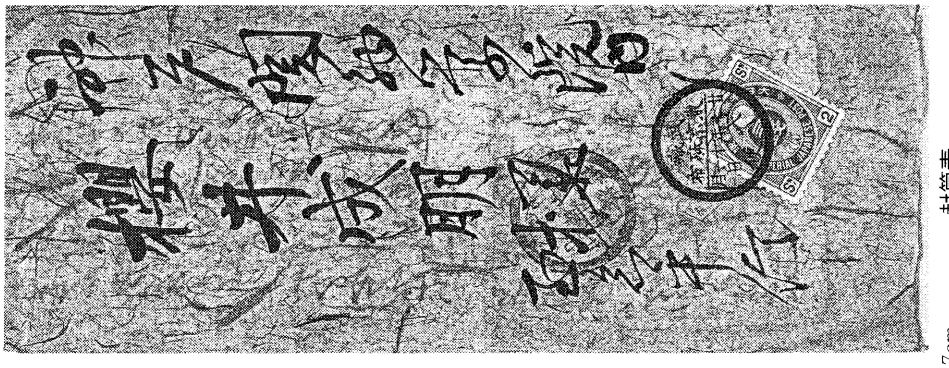
十一月七日夜十一時　　みな子

櫻井成明様
貴下

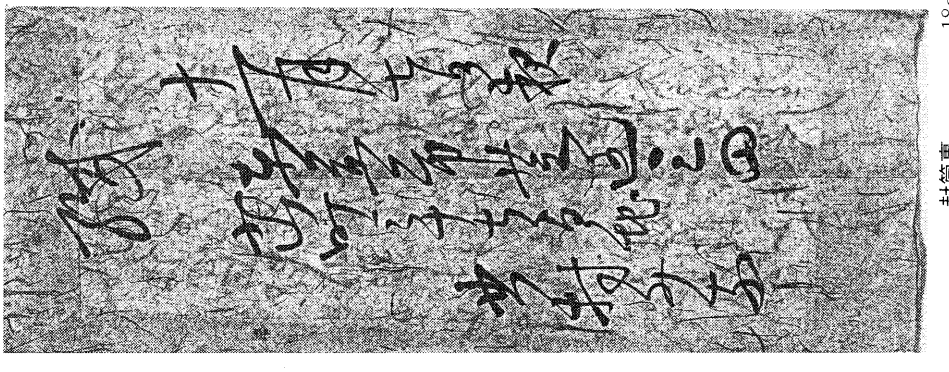


透谷と美那子（明治22年頃）

櫻井成明（明治24年７月29日）



封筒表



封筒裏

18cm×7cm

○引用文中，漢字は原則として新字体に改め，仮名遣いは原文にしたがった。
○“　”…「みな書簡」から引用，〈　〉…他の文献から引用，［　］…所蔵先，（＊，※）…筆者による注，《　》…草稿
○M…明治，T…大正，S…昭和，H…平成
○解読文中の①②③…は以下に掲げた参考資料の番号を示す。

①透谷（1868～1894）と美那子（1865～1942）と長女英（ふさ）（1892～1964）の3人は，国府津在前川村の長泉寺本堂隣の四畳間で，明治26年8月30日から11月3日まで（6，7月頃数日滞在した分を含めると約3ヵ月半）〈朴素な生活〉を送っている。

〈明治二十六年八月三十一日予が神戸なる関西学院に赴任の時かねて時刻を打合せおきたる所透谷ハ夫人美那子にふさ子嬢を抱かせ，この国府津の停車場に出迎へをり，五分間の停車時に尽きぬ名残を惜みて西と東に別れたるが焉ぞ知らんこれ透谷との永訣とならむとは〉（島崎藤村の『春』※を読みながら当時を追想した櫻井成明のメモ［早稲田大学図書館］。以下「成明メモ」と記す。）

※T10　新潮社版

〈国府津へ参つたのは健康の為めや教会と自分との間に紛糾があつた故であります。他には生活難と云ふやうな意味は内面にはあつたのです。国府津でも朝鮮（ママ）寺と云ふに間借りを致しました。この寺は先祖から菩提寺で住職とは先々から知り合で何にかと便利の好い事もありました。藤村さんの「春」にもありました通り私は裁縫の師匠さんをして近所隣の若い娘さんに裁縫を教へました。透谷は一週に二日宛東京に出て明治女学校に英語を教へてゐました。〉（「国府津時代と公園生活」北村透谷未亡人談『新天地』M41．10，『日本文学研究資料叢書・北村透谷』S47所収）

〈保養旁々国府津の方へ引移つたのは其年の六月頃であつたと思ひます。朝鮮（ママ）寺は先祖代々の菩提寺でしたから，当分其寺を借りる事に定めて，本堂の隣室の至極閑静な一室を撰び，寂しい生活を続けましたが，寺の大黒が大層親切な方で種々と面倒を見てくれました事は今も忘れません。透谷は一週二度づゝ出京して明治女学校で英語の教鞭を執り，傍ら霞町のウツドウオルスさんと，普連土女学校のヴレスウエートさんに日本語を教へてゐました。其頃宗教は面倒臭くていけないとか，無意味なものだとかよく申しまして，自分が西洋人の所へ行くのは唯パンの為だと始終話してゐました。時には宣教師の通弁等に行つて，途中から癪に障つたと言つて帰つて来る事も間々あつたやうでございます。国府津にいる間の生活は最も朴素を極めまして，私等は殆ど禁足同様，経費を慎みまして寺から外へは余り出歩いた事がありません。それでも唯た一度，親戚中に不幸がありまして，透谷には内證で留守の時を見計つて出て行きましたが，勿論経費等は親元から出して貰つて，その日の中に往復した事がありました。その頃透谷は脳の悪い上に，非常に用件が多く，神経が大変過敏になつて一寸した事にでも気を揉むといふ風でしたから，その事は到頭打明けずに了ひまし

た。〉（「透谷の晩年と其言行〔下〕」北村美那子『学生文芸』M44. 4）

②〈空花生（浅田英次*）は我関西学院の少年詩人なり，…中に一篇「月下恋」と題するものあり，これ予が亡友北村透谷を懐ふて咏ぜるものなり，生もと透谷を識らず，嘗て其作る所の詩文を読み，又予に就きて其人と為りを聞き，心に慕ふ所ありき。会ま透谷逝く，生悵然として生前に未だ嘗て一たびも面晤する機なかりしを憾み，また其非命を悲み，慨然として此篇を作る，一篇十一章気格高超にして風骨淡遠，われ之を読んで悽側の情に堪へず。　透谷の逝くや，東都の新聞雑誌挙げて皆天才の早凋を悼み，挽歌弔詞の陸続として其紙上にあらはれしもの実に数十篇の多きに及べり，名匠大家の死と雖も此の如く惜み悼まれしことの殷なりしは予の未だ嘗て聞かざる所なり。今又空花生其未見の友を感懐推挽して，情緒の濃なる一に此に至る，透谷以て瞑するに足れり。世の透谷を謂ふもの一人として其清逸を称せざるは無し，空花生亦月に比して其清徳を歌ふ。透谷は実に冲澹清雅，襟懐些の塵芥を留めず，…〉（「月下恋を読みて※」明石居士『評論』M27. 10. 8）
※『女学雑誌』（M27. 10. 13）に同文あり。

＊浅田英次（1865～1914）については，「故浅田英次氏の葬儀」『中外英字新聞』T 3. 11. 15，「故浅田英次氏経歴」『護教』T 3. 11. 20，浅田みか子編『浅田英次追懐録』T 5など参照

③太田敏夫（？～1909）〈日本クリスチャン教会牧師。宮城県石巻に生れる。1887（明治20）年6月D. F. ジョーンズが石巻伝道を開始するとともに求道者となり，九月現在の石巻栄光教会設立に際して受洗，日本クリスチャン教会の初穂となる。ジョーンズの通訳兼助手を務め，88年ジョーンズの東京伝道に伴われて上京，89年2月麻布（聖ケ丘）教会設立後，その役員となる。翌90年3月から1年間，無牧であった石巻教会を応援して帰京，再びジョーンズの下で働いた。92年10月ジョーンズに代って来任したA. D. ウッドウォースの通訳兼助手となり，94年から無牧であった岩手県一関の磐井（水沢）教会を応援し，翌年に帰京，無牧となった麻布教会の教師として働いた。高橋房太郎牧師来任後は教会役員，教会堂建築に際して建築委員となり，1902年10月教会堂の落成を見，しばらくして石巻に引退。〉（「太田敏夫」早川栄『日本キリスト教歴史大事典』S63）
〈…細川覚牧師（*日本基督教団石巻栄光教会）や武山二朗・同教会責任役員らが教会員名簿などをもとに調査を開始した。この結果，1. 現在の石巻市中央2丁目の姉歯産婦人科病院隣にあった石巻クリスチャン教会で創立記念日に当たる明治20年9月25日に洗礼を受けた。2. 同22年1月13日に牧師を養成する専門校・東京講義所に入った，3. 同42年2月2日永眠した—ことなどが明らかになった。だが，かなり古い話に加えこれといった参考資料もない中での調査のため，それ以上のことは分かっていない。…〉（「故太田敏夫さん　足跡探しています　明治の詩人・北村透谷と親友」『石巻かほく』H 6. 3. 10）

④〈…ローズの辞任を受理した米国クリスチャン教会外国伝道局では早速後任の人選に入り，ユニオン・クリスチャン・カレッジの教授A．D．ウッドワース（Rev. Alonzo Woodworth, D. D. 1857～1949）に，学識信仰両面に秀でた適任者として白羽の矢を立てた。ウッドワースは熟慮の上伝道局の申し出を受け入れ，1892年3月25日，オハイオ州デイトンで開かれた伝道局の会合で妻アイダ（Ida）およびアイダの姉C．T．ペンロッド（Miss Christine Tena Penrod, 1866～1922）とともに日本派遣宣教師に任命された。…彼は妻アイダと義姉にあたるペンロッドと共に，1892（明治25）年10月，東京に着いた。…ウッドワースはローズが残した神学教育を継ぐとともに，麻布教会をはじめジョーンズが開いた各伝道地その他で伝道にあたった。通訳は太田敏夫がつとめた。ペンロッドはユニオン・クリスチャン・カレッジに学び，女性ながらすでに按手礼を受けており，ウッドワースと共に伝道にたずさわった。…ウッドワースとペンロッドは北村透谷を日本語教師に迎えたが，伝道に多忙をきわめたため，その成果ははかばかしくなかったらしい。透谷は再び東北伝道に赴き，一関磐井教会などに滞在している。…〉（聖ケ丘教会100周年記念誌委員会編『聖ケ丘教会百年史』H1）

〈ウドオルス先生がいらして間もなくであらうと思ひます。イービー宣教師に日本語をお教へしてゐた透谷は先生の日本語の教師となりました。それからクリスチャン教会に出入する様になりました。其の頃には宣教師としてウドオルス夫人の御令姉ペンロード先生，ジヨーンズ先生もゐらつしやいました。然し間もなくジヨーンズ先生は御帰りになりました。牧師の働きをしてゐられたのは太田敏夫様であつたと思ひます。太田様は非常に英語の御堪能な方で宣教師方を英語で色々御戯談を仰つて笑はせられ，又からかはれたりして居りました。太田様はウドオルス先生の通訳も兼ねて居られた様に思ひます。ペンロード先生の通訳には浜口れん様が当られました。

…ウドオルス先生，ペンロード先生は教会の御働きの他に神学生を教育して居られました。森元町あたりに太田敏夫様の御住ひがあり，其処に神学生が宿つて居りました。…明治二十七年五月透谷が死去致しましてから私はペンロード先生の日本語勉強の御手伝ひを致させていたゞく様になり，霞町に一緒に住はせていたゞきました。そして間もなくペンロード先生は三田小山町に御転居になり私も共に住はせていたゞきました。教会の集会は日曜朝夕共に三十名位でしたでせう。婦人会はペンロード先生が御やかましくて中々盛会でありました。…明治三十一年ウドオルス先生は夫人の御健康が勝れず，日本の風土が夫人に適せぬのであらうと言ふ事になり，御帰米なさる事になりました。私も御伴して渡米致しましたので其の後の事は存じません。…〉（「追憶」北村美那子氏談『麻布基督教会の五十年』S13）

〈…二，三年前まで，クリスチャン教会の宣教師で，ウツドヲルスといふ人あり，青山学院神学部に来て，ギリシヤ語を授けてゐた。同氏に聴くに，北村透谷は，同氏の説教の通訳を屢々した相であるが，ウツズヲルスに評させると，余り通訳はうまくなかつたと云ふ。千里を走る馬は，トラツクの外を走るべく，鞭を加へられたのであらう。…〉（「日本基督教文学夜話5透谷，独歩，不知庵，

春雨」比屋根安定『日本基督教新聞』S10. 9. 27)　アメリカ・クリスチャン教会外国伝道委員会に〈…I have thought that he (*Mr. Kitamura) and Mr. Ohta would be a sort of Paul and Silas. I have great confidence in them. …〉(『Herald of Gospel Liberty』1893. 9. 7)と書き送ったのはウッドワースである。

◉C・T・ペンロッドについては他に「日本の廃娼運動に一生を捧げた或る米国婦人宣教師の略伝」茂木宏『イエスキリストの良き伝道者 Dr. A. D. Woodworth の生涯(1857～1949)』H 2 を参照

⑤〈…鶴子(*英)は母のそばに据えられて，おとなしく遊んでいた。ようやくひとりで歩くぐらいの年ごろで，父の亡くなったことも知らずにいるらしい。その無邪気な，愛らしい顔つきが，一層人々にあわれを催させた。「父さん，ねんね。」こう鶴子は片言まじりに言っていた。青木(*透谷)の遺骸は暗い部屋の方にあった。…〉(島崎藤村『春』岩波文庫S45)それから半年後，“日増に成人”する英の父に対する思慕はつのるばかりであった。

⑥文学界雑誌社版『透谷集』M27. 10. 8刊

⑦〈…秋風肌寒し，透谷連りに蝶の行衛を憐れむ。「眠れる蝶」は文学界(*9号M26. 10. 3)にあり，「蝶のゆくへ」は三籟(*7号M26. 9. 30)にあり，「双蝶のわかれ」は国民之友(*204号M26. 10. 3)にあり，生，死運命の前に任せんとす。荘子夢に蝴蝶となる，而して透谷は蝴蝶に夢を観ずる乎。〉(「〔評論之評論〕透谷と蝶」三浦泰一郎？『護教』M26. 10. 14)

⑧〈…その年(*明治26年)の九月頃であつたと思ひます。子供が過て火傷をしましたのが大変に腫れて，何だか悪性の腫物のやうに思はれましたので，治療旁々再び東京に舞戻る事になりました。透谷はその後になつてもよく国府津の事を思ひ浮べまして，あの頃の生活は面白かつたと口癖のやうに申してゐました。私は其後暫く郷の方に参つてゐましたが，…〉(前掲「透谷の晩年と其言行〔下〕」)

⑨“非常なる不平”の内実は美那子に宛てた透谷の書簡(1893年8月下旬，花巻より)によく表れているが，次の『春』の一節からもその事情の一因がうかがえる。

〈細君と子供は実家の方へやって，当分別れ別れに暮らして見るつもりだと言い出した。「どんなに倹約したって，僕のところでは月に三十円かかる，それより以下では暮らせない。」と言った。「家のやつは，君，下女でも使わなけりゃ，いられないという婦だからね。」こんなことまでも言い出した。「無理もないサ。」と青木(*透谷)は何か思い出したように嘆息して，しばらく岸本(*藤

村）の顔をながめて，「ナニ，君，そんな悲しい意味で別れるんじゃないよ。」しまいにはこう言って笑った。……この母親（*ユキ）の潔癖は青木の神経質によく似ていて，何事も自分の思うとおりにしなければ気が済まないのであった。寄る年波と共に，その潔癖は忍耐力の少ないものになっている。青木は思い屈したような目つきをして，ひどく頸窩のところを気にしていた。その様子が母親の目にはいたましく映った。「だから，わたしが言わないこっちゃないよ。」と母親は深いため息をつきながら，「家を持つのはまだ早い。持っていい時期が来れば，お前が黙っていたって，親の方で持たせる。そんなに早く家を持ってごらん，きっと困る時が来るよ—そりゃあ，もう，目に見えてるッて，あれほどわたしが言って聞かせたじゃないか。あの時にわたしの言うことを聞いて，辛抱しさえすれば，こんなに夫婦で困って来るようなことはないんだ。それをお前が用いないで，なんでも操（*美那子）をお娵さんにもらいたいと言って，先方様のお交際ができようができまいが，そんなことにはもう一向頓着しないんだもの。あの時，親類もいろんなことを言った。駿さん（*透谷）はどうするつもりだ。定まって入るべきものも入らないじゃないか，みすみす困るのは知れきッてる。母親さんがそばに付いていながら，黙って見てる法がないなんて。無論，わたしも不服だったサ。何を言ってもお前は聞き入れないし，操もかあいそうだし，と思うから，わたしがこの二階で仮りに世帯を持たせて見て，—まあ鍋釜にも及ぶまい，若いものが二人ぎりなら雪平で間に合う，学問ができたって御飯の加減をするのはまた別だから，こうおしよ，ああおしよッて，わたしが操に教えて，それからお前たち夫婦を世間へ出してやった。ホラ，今となって見ると，わたしの言ったとおりじゃないか。」「まあ，お聞き。」と青木の母親は言葉を続けた。「この節親類の方で何を言うかと思ったら，ああしてうっちゃって置いた日には今に駿さんも身を壊しちまう，もうすこし細君も気を付けてくれそうなもんだなんて。あんなことを聞いた時はわたしもナサケないと思ったよ。なんとか，お前，やり方を変えて，成り立って行かれるようなくふうはないものかね。」「頭脳の具合さえよくなれば—」こう青木は答えて，やがて不思議そうに母親の顔を仰いだ。「だからサ。」と母親は心配して言った。「それをわたしが思ってやる。お前のようにからだが弱くて，おまけに若い時から世帯を持とうなんて—それがいったい無理なんだよ。」「そう母親さんのように言ったッても困ります。今さらどうすることもできないじゃありませんか。」「こうして見たらどうだね。操は当分実家の方にいてもらってサ，お鶴（*英）はわたしの方で預かってもいいから，お前はお前で一つやってごらんな。一緒になっているに越したことはないが，家があればそれだけ気を使うし，よけいな心配もするし—」「一緒にいないたって，心配はしなけりゃなりません。」「そう言って見れば，まあ，そんなものだけれど。」しばらく親子は無言であった。種々な感慨は追憶の情にまじって，錯乱した青木の頭脳の中を通り過ぎた。「つまり，別れろと言うんですか。」こう青木が言い出した。「ばかなことをお言いでない。」と母親は目を輝かして，「そうお前はとるから困る。だれが別れろなんて言うものかね。当分操は実家の方にいるようにッて，今わたしが言ったじゃないか。ここしばらく別々になってサ，お前も身が立ち，立派に妻子を養っていけるように

なったら，そこで一緒になるがいいやね。わたしはお前たち夫婦の一生のためを思って言ってるんだよ。」「母親さん，病気しているものにそんなこと言ったッても—」「いえ，お前の病気はそうしなけりゃなおらない。」急に青木は目を瞑って，すこし仰むき気味に頭を揺すった。顔色も青ざめて来た。「済みませんが，モルヒネを取ってください。」と青木は母の方へ手を出して言った。「母親さん，わたしは今なんにも考えられません。」睡眠薬として医者のくれたものは，書棚にある。母親は立って行って，その袋を取り出した。やがて階下から湯のみに水をいれて持って来た。わが子のために白い散薬を開けた時は，思わず母親の手がふるえた。……亡くなった友だちが青木の夢に入ったというは，めずらしいことであった。節子（*富井まつ）とは一度師弟（*普連土女学校時代）の縁もあり，親しく交際し始めてから二，三年になる。友だちもすくなく，またしいて友だちを作ろうともしない青木の寂しい生涯も，この人があって，はじめて一枝の花を添えた趣があった。暴風のために奪い去られたような節子の死は，実際青木の身にとっておそろしい打撃であった。多くの生の興味を打ち消されたのも，このまれな知己を失った愁いからである。「父さん，仮寝して風邪をひくといけませんよ。」こう言いながら，操がはいって来た。青木はまだ夢の心地でいる。日の光のさす窓のところには，なんとなく鉄の格子でもはめてあるような気がしている。膝を折って，壁にもたれて，歯をかんで，それからこう重い頭をたれ下げて彼は，なんとなく鋼鉄の鎖にでも縛られているような気がしている。楽しい笑い声が階下の方で聞こえた。しばらく操は耳を澄ました。こうして親子連れで来ているということすら，操にとって一通りの心づかいではなかった。おまけに，親類は親類で，口うるさく種々なことを言いたがる。「ああどうも駿さんのように弱るわけがない。」などと飛んだところで，言うに言われぬツラい思いをすることが多かった。操はすこしやせた。「あなた，こないだ母親さんが何かおっしゃりゃしませんでしたか。」と操が言い出した。深い，いたましい，瞑想的な目つきをして，青木はつくづく妻の顔をながめた。「あゝ。」と操は嘆息して，「せっかくこれまで苦労して来て，今ここで離ればなれになったんじゃツマリませんわ。いつまた一緒になれることだか—」「へえ，お前にもそんな話があったね。」と青木が言った。「すこしはわたしの身になって考えてくださりそうなものだ。」と操はしおれて，「こうしてあなたも病気していらッしゃるもんですから，少しは家の財産を分けてくだすったッて—」「いや。」と青木は首を振った。「それは母親さんをよく知らないと言うものだ。決して母親さんはそんな人じゃない。末の見込みがついて，これならば大丈夫，という時でなければ財産を手離す人じゃない。今ここで分けてくれたッて，みんな僕らが失くしちまう。こう母親さんは心配している。だから，養生するものは養生するがいいし，食えなければ自分で働くがいい—他の世話になるな。これが母親さんの主義なんだ。実に強い人だ。母親さんがああいうのは，決して悪いつもりじゃない。」「しかし，わたしたちのためを思ってくださるなら，なぜ一緒にやれとおっしゃってくださらないんでしょう—たといどんな苦労をしてもいいからどこまでも二人で一緒にやれッて。」「そう言ってくれる時期は，もう通り越した。」こう青木が言ったので，操は不思議そうな顔つきをした。操には夫の

言う意味がよくくみ取れなかったのである。「わたしがお気にいらないんでしょう。」と操は独語のように嘆息した。…〉（前掲『春』）

⑩“小弟”とは美那子の弟・石阪公歴（まさつぐ）（1868～1944）のこと。

〈石阪公歴は自由民権の闘士からアメリカ西部の開拓者へと転身し，サクラメントの大平原に日本人開拓者としては最初の鍬を打ちこむ。それから彼の一生はどうなったか。事業に失敗し，新聞経営に失敗し，家庭作りに失敗し，最後はアラスカにまでゆく季節労働者となり，第二次大戦下には失明して，ついに恐ろしい砂漠の死の谷，デス・バレーの日本人強制収容所で，誰からもみとられることなく死んだ。私はこの薄幸な放浪者の墓をさがし求めてコロラドの山中まで踏みいり，パイオニア・セメトリー（開拓者墓地）の雪の中で対面したのである。〉（色川大吉『自由民権』S56）

〈…英子は非常に懐かしみをこめて，「公歴叔父さんはほんとにきれいな心と容姿をもった淡泊な人でした。しかし，お酒が好きでね，そのうえ利財の才に欠けていたため，あちらでも貧乏していたのでしょう」と話してくれた。あるとき，公歴は英子をつれて上野公園にゆき，姪と一日中遊んでくれたという。「その折，私が石につまずいて下駄の鼻緒をきってしまいましたら，叔父はすぐ私を背中におぶってくれたのです。そのとき私は十六の娘でしたから，叔父の背で顔を赤らめました。」そう懐かしんでいた透谷の娘も，もうこの世にいないのである。…〉（色川大吉『新編明治精神史』S48）

⑪巌本善治（1863～1942）に対する“不平”の一つは美那子宛透谷書簡草稿（1893年8月下旬，花巻にて）に記されている。〈…詩人は面白かりて道を説く伝道師にあらず，悲しきに悦びを飾りて世をくらます隠君子にあらず，徹頭徹尾社会の実勢を見，不調子を看破し，真理をかざして進むにあり。道程いかに険なるを知らず，航路いかに荒るゝを問はず。I君（*善治）の任のごときは表面にあり，われらの責とするところは裡面にあり。かれ女子を悦ばすの説をなす，わが心あるひは女子を驚かすことあるを期す。〉

星野天知（1862～1950）に対する“不平”はどこにあったのだろう。その回想文がわずかながら手がかりを与えてくれている。

〈…透谷や吾々の文が女学雑誌には少し堅苦しくて相応しくないので巌本君の提議で其雑誌を赤表と白表とに分けて隔週に出す事とし白表の方は私が編輯を引受ける事にした。併し其でも兎角落着かないので困つて居た矢先きだから，寧ろ「女学生」と共に之も停めて別に一雑誌を出そうといふ事に期せずして巌本君と私との意見が合つた。丁度其頃藤村君（*島崎藤村1872～1943）が煩悶の極，さすらひの旅へ出る時で私の相談対手は禿木君（*平田禿木1873～1943）一人であつた。透谷は客員として仲間には加はらないで居るし，藤村は旅より尽力する事としたし，秋骨君（*戸川秋骨1870～1939）はまだ力には成らないと思て居たし，禿木君と二人でやろうと決心した。こんな事

で一月も半ばをすぎた。好し自分一人でもやツ着けやうと，直に出版届の筆を執つたが，まだ雑誌の名が無かつた。そこで私は直に女学雑誌の文学界といふ名を書いて禿木に見せた。好かろうといふので何の体裁も考へる暇なく秀英社へ印刷を依頼した。禿木の「兼好法師」が締切り日を経ぎて届くし自分も考へる暇なく一夜作りで「阿仏尼」を書いて穴を埋め，やつと月末に辛ふじて第一号を出す事が出来た。…創刊号は千五百部出したが直ぐ売切れ，直様再版一千部を出したが又売切れ，第三版をとの事であつたが之は止めた。…透谷は素より藤村の先覚たり畏友たり，炯眼の闘士として歓迎はして居たが，此雑誌には彗星的光芒で恒星として期待は出来なかつた。それに根底の宗教信仰が皆々と違つて居る所もあるので後人のいふやうに同君は文学界をリードしては居なかつた。文学界を学校とすれば学監は禿木，藤村が首座教師，透谷が嘱託講師で，私が校長兼会計で，夕軒（*天知の弟）が庶務といふ所だ。…二号から透谷が民友社の攻撃に応酬し，内部生命の解釈を明かにした。そして文学界同人の思想を認識させて誤解を釈こうと勤めた，にも係らず世間の低級な評眼はどうしても厭世詩人として，光明ある理想を見詰めて居る厭世詩人だといふ事が分らない。…私は民友社が当時功利的な論鋒で青年を鼓吹し，浅薄な功名心をそゝるのを慨し，没趣味，没理想の民情を憂ひ，人情の湿ひを高唱して物質以外に高遠なる思想界の殿堂が厳存して居る事を文芸に拠りて鼓舞しなければ成らぬ，宗教的根底なき文芸は世俗に追随するのみでリーダァではないといふ意気で何れも西欧文学を例に取つて心血を絞つたものであつた。…創刊以来一ケ年で透谷は筆を納めて論争の鋒を倒し，初志の如く皆々専ら詩人に欝懐を謡ふ事を願つた。此一期限の最終に於て「劇詩の前途」を透谷が発表したまゝで終つたのは，私の最も遺憾とする所である。劇詩の事に付ては藤村君を推して居たが，ドラマは此次ぎに差迫つて来るべき問題で，どうしても社会に叫ばねばならぬと透谷と屡々談じ合つた問題なので，私はがつかりして仕舞つた。…〉（「「文学界」雑誌顚末」星野天知『明治文学研究』Ｓ９．６）

〈雑誌面にある通り，三号までは女学雑誌社よりの発行で，巌本社長配下に属して居たから，女学雑誌文学界と表記した。所が創刊号に巌本善治記名の文章道一文から同人間に異議が起つた。それは禿木からの申出でゞ，以後同君の寄稿を謝絶せよとの事である。私は困つた。別に主義主張に反対する意見でもないのに，之を断るとすれば，其の人とも其社とも絶縁する事となろう。斯ういふやうに一本槍の毛嫌ひを始めると，此先き誰々を退けろ，何某を排斥せよ，と云ひ出されては，結局若造の月並仕事で，雑誌発行など永続するものではない。併し今鋭気を挫いては，大切な出鼻を砕かれて仕舞ふだろうと考へたから，程よく巌本君へ断つて，私が出版をも引受け，茲に始めて「文学界」は，付属雑誌でなく，私の物になつたのである。…〉（星野天知『黙歩七十年』Ｓ13）

〈明治二十六年新たに発刊された彼の『文学界』の初号には「富嶽の詩神を思ふ」といふのが掲げられてありましたが，これは鳥渡世間の評判が好かつたやうで，新聞雑誌の中では大層賞めて書いたところもありました。透谷はそれを見て言ふには，「あんな小さいローマンチツクな華やかなものが悦ばれるやうでは，自分等の前途は未だ遼遠だ」と甚く落胆してゐたやうでございます。当時

透谷は飽くまでもドラマで立つて行くつもりでございました。慥か坪内逍遙さんの沙翁劇が，『早稲田文学』に載つて，それが非常に評判の可いのを見て「此れからは自分等の時代が来るんだ」と言つて，嬉しさうに微笑んでをられました。…〉（「透谷の晩年と其言行〔上〕」北村美那子『学生文芸』M44. 3）

◉〈文章ハ実際ヲ尚ブト愛山ノイヘルヲ透谷ハ駁シテ文ノ極致ハ理想ニ在リ（？）ト〉（「成明メモ」）と成明によって要約される激列な文章解釈論争を展開した山路愛山（1865～1917）と透谷が出会ったのは明治24年夏，本郷区龍岡町の成明宅においてであった。（明石居士《四畳半　第一輯》T10）　美那子の回想に〈その頃山路愛山さんは御近所で，時々来られましたが，その時から山路さんは最う大家でしたけれども，心置きなく話し合って居られたやうです。話に興が乗ると随分夜更かしすることがありました。〉（「文士の夫人の見たる文士及び其家庭」『新潮』M43. 11）とあるように，「唯物論者」「空想家」と応酬しながらも互いの資性を決して害なうことのない〈最も信認すべき論敵〉の真心を尽くした交流が偲ばれる。

亡くなる2年ほど前に，成明の求めに応じて書いた愛山の文章には成明の（そして愛山自身の）人柄がよく表れている。

〈生れて五十年大病と云ふことを覚へざりし僕が丹毒と云ふ病気に取付かれしかも意外の悪症にて九死に一生を得赤十字社病院より退きて家に帰りシ翌日明石先生此書を持して予に示す。先生の病（*喘息）と戦ふこと久しくて又忍べりと謂うべし。先生など丶他人行儀は面倒臭し。やはり明石君で御免蒙る。僕と明石君とは趣味の大分相違したる友人也。或時僕は明石君も善いが謡曲をうなるだけは老人臭しと云ひしを誰れやら君に託していや味を云はれたることあり。明石君其厳君以来篆刻を好まれ其道の通なり。僕はそんな洒落たことを何とも思はぬ野蛮人也。明石君より云へば蓋し済度し難き衆生ならむ。僕より云へば明石君は流儀の違ふ人物也。さりながら僕は節に明石居士に敬服す。僕は明石居士の侠骨を愛す。僕は明石居士を温厚の居士なりなど丶思はず，窃に兄イ株（アニカブ）の世話焼きにして好んで人の急に赴く男らしき男として尊敬す。此批判間違たるやも知らず。さりながら僕の心に写る明石居士は誠に斯の如し。回顧すれば二十年前僕はきたなきぼろ書生也。それでも気位は中々高かりし。かびの生（ば）へたる布衣を着け平気にて明石居士の書斎に闖入し，勝手に群書を乱抽し，昼飯の馳走になりて，更に夕飯の馳走になり。それから泊り込んで勝手にしやべり散らして居士の家の平静を破りたること少からず。居士と居士の家の人々はそれでも一度もいやな顔をしたること無し。居士は僕より一年の弟なりと覚へたれども僕は居士を以て兄株とし，緩急相依頼すべきものは実に此人なるべしと思へり。爾来今日に至るまで友人の男らしきを数へて先づ五指を屈するときは必ず明石居士を思はざるなし。御世事きらいの僕なれば是は真情なしと察したまへ。悔らくば僕塵世に奔走して居士の病に同情すること薄かりしを。唯だ居士一家の養生淡なり。苦中却て楽む。僕の輩猶ほ慰むる所なり。居士願くは寿なれ。　大正四年八月五日（赤十字社病院退院の翌日）　愛山生〉［櫻井まつ子氏］

⑫勝本清一郎「透谷年譜」(『透谷全集3』S44)には〈明治廿六年十二月廿八日，弥左衛門町宅で自殺未遂。咽喉を傷け，東京病院に運ばれた（ミナ直話)。〉(傍点筆者）とあるが，より記憶が鮮明なこの書簡の「廿三日」の方が事実に近いだろう。

〈…翌年（*明治27年）の二月から東京病院に入院致しまして一ヵ月以上も病院生活を続けてゐました。…〉(前掲「透谷の晩年と其言行〔下〕」)

⑬透谷の治療に当たったのは，東京病院創立者・高木兼寛の義弟に当たる瀬脇寿雄という当年29歳の医師（院長)。略歴は次の通り。〈瀬脇水治院長・ドクトル瀬脇壽雄氏　氏は元治元年四月の生れにして少壮医道に志し明治十九年英国に航し有名なるセントトーマス病院プロンプトン肺病病院に於て医学を研修する事五年遂に「ローヤルコレージ，オフ，ゼ，サージオンス，オフ，イングランド」及「ローヤル，コレージ，オフ，ゼ，フヰジシアンス，オフ，ロンドン」の試験に合格して「メンバー，オフ，ゼ，ローヤル，コレージ，オフ，ゼ，サージオンス，オフ，イングランド」及「ライセンシエート，オフ，ゼ，ローヤルコレージ，オフ，ゼ，フヰジシアンス，オフ，ロンドン」の学位を荷ひて帰朝し廿四年東京病院長となり同年九月慈恵医学校内科講義を担任し同廿六年医術開業試験委員となり廿八年に至り職を辞して韓国に到り聘せられて同国内部顧問に任ぜられ兼て漢城病院長となりて同国の医事に関し貢献する所多し明治廿九年帰朝して京橋区に開業す〉(工藤鉄男『日本東京医事通覧』M34)　東京都公文書館には自筆の履歴書が残されている。

⑭〈…その当時はお医者様も別に悪い個所は無いと仰いました位で，私等の眼から見ると却つて以前よりも肥つたやうで，友達の方と話してゐる様子も健康な時と少しの変も無く，寧ろ元気らしく思つてゐた程でございます。退院後間もなく芝公園の近くへ引移りましたが，それから一ケ月余り経つと何処かしら具合が変になつて始終延髄の所を撫で乍ら独で凝然と考込んでゐるのです。そして時に依ると室内を歩き乍ら自分の足音が邪魔になるとか，頭に響いて困るとかいふやうな事を言つてゐました。この頃から一切訪問客を謝絶して，いつも書斎に閉籠つて読書に耽つてゐたやうでした。従つて好きな散歩も段々嫌になり，独りで静に黙想するといつた様な風を好んだやうです。時々私に聖書を読んでくれといふものですから，成る可く好きなやうな所を選んで聞かせてゐますと，何時迄経つても黙つてゐるので，何だか気味悪く思つてゐますと突然「何をしてゐるんだ」と叱るのですもの，実際情無くなつて了ふ事がありました。それから日本の文学者は何時優待されるやうになるだらうとか，若しさうなつたら誰が一番優待されるだらうとか，自分の様なものは到底世間が容れてくれない，乞食になつて人の門に立つより外に仕方が無い人間だとか，世間はどうして斯う自分を圧迫するだらうとか―そんな事計り考へてゐた様です。ですからその頃の私は真個に辛い悲しい思いを致しまして，病気の夫を気遣ふ事よりも，子供の将来に就て，一人でよくよくと

気を催いてゐたものでございます。〉（前掲「透谷の晩年と其言行〔下〕）

〈…◎何しろ透谷があゝなりましたのも，家庭がうまく行かなかつたのが第一の原因です。両親は全く旧時代の町人気質，弟はすつかり商人風，その間にあゝ云ふ風変りな人が挟まつて居たのですから，そりやもうどうしても円満に行く筈がありません。どうも家庭の不和は一番怖ろしいものですねエ。…◎『春』にありました刀騒ぎも殆んどあの通りです。あの時分の事を思ひますとたまらなく苦しいのです。◎透谷の方の家庭が前申したやうな上に，私の里方は又母が非常にジミでしたから，とても私等などゝ合ひつこはなかつたのです。詩人の妻など云ふものは，どうせ満足な夢は見て居られないものなんでせう。◎刀の傷は経過がたいそうよかつたのでじきに癒りました。並ならば傷は何とも思はないのですが，何分頭が病気なんですから非常にそれを苦にしましたので一層悪かつたのです。◎あんな事もさぞかし父母からは私が不注意からだつたと思はれてるでせうよ。何でもかまひません，私は私で信じて居りますから。◎透谷は筆をとらなくなりましてから，気分も好くなり，身体も肥りました。尤も私に本を読ませて聴いて居ながら，いつの間にかポカンとなつて「あゝ本を読んでくれてたんかねエ，スツカリ忘れてしまつてた」などゝ云ふ事が有りました。そんな風でも友人には普通に対応して居ました。◎それにどんな事の間でも，私と舅姑との間をよく保護してくれました。私は今でもそれを思ひましては，泣いて感謝して居ます。◎病院を出ましてからは何も書かないで，「我が事終れり」と云つては居りました。しかし性来が性来ですから内は始終燃えて居たのです。一体，透谷と云ふ人は，外は虫も殺さぬやうな優しくて居て，内がいつも烈しく燃えて居た人です。そしてどんな時でも，何かじつと考へ込んでイライラして居ました。たゞ果物が大の好物で，果物をたべて居る間だけは何も考へなかつたやうです。…〉（「『春』と透谷」北村氏未亡人談『早稲田文学』M41. 7）

〈○国府津の住居を畳んで弥左衛門町に帰り間もなく芝公園に二度目の家を持ちました。此所へ移つた時は余程変で，ある時西洋人の宅から「ジヤパン」と云ふ日本の風俗習慣人情などを書いた，一口に申せば日本側面観と云つた風の本を借りて来て私に読んでくれと申すから読んでゐると不意に私の手を握つて「おいお前は何にをして居るのだ」と不思議に尋ねます。「貴君が頼んだ，この本を読んでるのです」と答へると「さうか，さうだつたかね」と瞑想から醒めたやうな眼つきを致しました。或時も自分の好きな聖書の章を示し読んで聞してくれと申すので読んでゐると矢張り前のやうな事を申しました。よく考へる性質なので一度考出すと何事をも忘れると云ふ風でありました。○弥左衛門町の折りに私が透谷の持つてゐる短刀を奪ひ取つたのを非常に残念がつて「お前があの時刀を取らなければ」とは断へず云ふてゐました。総ての煩悶苦痛は過去を追懐するに依つて激烈に起つたのではあるまいかと思はれたのです。〉（前掲「国府津時代と公園生活」）

⑮〈…○透谷が私に語つた言葉で永久忘れられぬ印象を私に残したのは左の一句です　厭世と云ふものは家庭の不和の破れた時でなくては起りません。…〉（「満州からの通信」巌本善治『明治文学

研究』Ｓ９．４）

⑯〈…透谷子は結婚後しばらくは子供が出来なかつた。漸く五年目の明治廿五年の六月に英子嬢が生れた。子は大そうに喜んで，一夕訪ね来て「女の子が生れたよ。名はフサ，漢字の英を充てゝ届けておいた」といつた。…〉（「透谷子を追懐す〔承前〕」櫻井明石『明治文学研究』Ｓ９．６）
〈◎兎に角あの時分散つてしまつたのは実に不幸でした。成程生活には骨が折れたでせうが，子供を楽しみにして音楽者にでもしてなどゝ云つて居ましたが，それすらもう云つても無益な事なんです。〉（前掲「『春』と透谷」）
〈○大した子供好きで始終子供の事ばかり話しました。自分では子供に十分音楽を仕込んで天晴れ大音楽者にする考へで，此んな何十年か先きの事を生れ落ちて三月か四月になる子供を抱き上げて，つくゝ見入り，其の意を解しでもする者に向ふの如く申してゐました。之れと云ふのも自分が不器用ながら子供にやらせて見たかつたのでしやう。〉（前掲「国府津時代と公園生活」）

⑰〈…隣の部屋に寝かして置いた鶴子が，その時，目をさました。操は子供を抱いて来て，やがて菓子を持たせて遊ばせて置きながら，ちょっと階下へおりたが，間もなく引き返して来て見ると，鶴子は菓子を奪られて泣き出している。夫はそれをムシャムシャ食っている。操は腹が立つやら，おかしいやらで，泣いている子を抱いたり，すかしたりして，「オゝいい子いい子。もう泣くんじゃないの。ほんとにいけない父さんだよ，鶴ちゃんのお菓子を奪って食べたりなんかして―」鶴子はまだ泣きじゃくりをやめない。「父さん，め。」操は鶴子にしかって見せた。青木は寂しそうに笑いながら，しばらくわが子の様子をながめていたが，何を思い付いたか急にまじめになって，「鶴ちゃん，堪忍しておくれ。親のつとめも尽くさないで済まないね。」こんなことを言って，頑是ない子供の前に手を突いた。そのわびる調子が平素とは違って聞こえたので，なぜ夫がそんなことを言い出したか，それは操によくわからなかったが，ただなんとなく気の毒になって来た。操は夫を見て言うに言われぬ哀憐と同情とを感じた。…〉（前掲『春』）　〈…二，三日の間，自分の子供を頻りに拝んでいた。…〉（「僕の回想」岩野泡鳴『泡鳴全集11』Ｔ10）

⑱〈…君，輾轉反側，思を幽玄に凝め，精を極上に潜む。遂に直接伝道に全身を委ねんとするの意あり。嘗て病蓐に余を控へて曰く，二十世紀の詩星は寧ろヲルヅヲルス，トルストイの類ならん，文学に於ける吾が立場も稍や変化せんとす，吾にして若し可なりとせば，将来大に伝道し傍ら文学の評論に従事せんと。余，則はち友人押川方義（*1850～1928）を其枕頭に伴ひ，大ひに将来の為に約する所のものありき。…〉（「透谷北村君を吊ふ」巌本善治『評論』M27．６．５，『女学雑誌』M27．６．９）
〈巌本君が心配して，押川方義氏を連れて，一度公園の家（*芝公園地20号４番）を訪ねて，宗教

事業にでも携はつたらどうか，といふ話をしたといふ事を聞いたが，後で私が訪ねて行くと，「巌本君達が来て，宗教の話をして呉れたが，どうしても僕には信じるといふ心が起らないからね」と，そんな風に話した事もあつた。…〉（「北村透谷の短き一生」島藤藤村『藤村全集６』Ｓ６）

〈僕が子に会ったのは一度で，二度目に会ひに行った時は，病気が重いので，医者が面会謝絶を命じて居た。それが数寄屋橋の煙草屋で，おッ母さんが出て来て，いろいろ心配さうに話しをしたことに拠ると，子は子供の時から頸の後ろの神経交叉点に故障があったので，それまでにも時々変なことがあったらしい。僕が最初で最後の会見の時も，応対をする毎に，頻りに片手で襟元を気にして居たのが，何となく僕に異様な感じを与へた。…押川春浪氏のお父さんは，僕も恩義上第二の父と思っている人で，当時，東北にあって，京都の新島襄と相対して，宗教家の大立者であった。透谷子は，病気が直ったら，いよいよ正式の伝道師になると決心して，その人をわざわざ招待して，病蓐のうちにあって会見したことがある。子の自殺よりも，此の決心の動機の方が，子に取っては，寧ろ悲惨な事件である。どれか，子の筆になった物を見て，僕はこの人，必らず自分の詩才が自分の思ふ様に行かないのを深く感じて居ると思ったことがある。『文学界』で漸く甘く行きかけた自分が，手ひどい攻撃は受けるし，何を書かうとしても，輪郭ばかりの腹案で，その筆がどうも動かなくなって来た。詩人として，煩悶すまいと思っても，せざるを得まい。この失望の極は，伝道師になるか，自殺するかの二道よりはなかったのだ。僕もかういふハメに落入った経験があるが，詩人が伝道師に化け得たなら，畢竟胡麻化しである。さりとて，自殺をするのは，なほ更ら胡麻化しである。…〉（前掲岩野泡鳴「僕の回想」）

⑲〈…夕日のひかりは部屋の内に満ちた。反抗忿怒の情は青木の胸をついてわき上がって来た。彼は爆発弾を投げる虚無党の青年の例なぞを引いて，敵を倒すと同時に自分も倒れて同じく硝煙の中に消えて行くことなぞを言って，目的はとにかく，すくなくもその精神は勇ましい。こんなことを妻にむかって熱心に語り聞かせた。「あゝ，お前も敗北者なら，おれも敗北者だ—どうだね，いっそおれと一緒に…」操はあきれて夫の顔をながめた。しばらくの間，彼女は物も言えなかった。「まあ，あなたはどうかなすったんじゃありませんか」と彼女の目が言った。「わたしはいやです。」と操は力を入れてしばらく考えたあとで言った。「子供がありますから，わたしはいやです。」「子供がなけりゃ？」と青木が問いかえした。「子供さえなけりゃ，そりゃもう，どんなになったッてかまいませんけれど—」こう操は答えたものの，なんとなく恐ろしいところへ無理に一緒に引き入れられるような気がした。「父さん，父さん，これほどわたしはあなたのために苦労しているじゃありませんか，何もかも犠牲にしてあなたの言葉にしたがっているじゃありませんか—まだそれでも足りないんですか。」こう操は腹の中で言ったのである。「はゝゝゝ。」青木は笑いに紛らしてしまった。…〉（前掲『春』）

⑳〈なぜ青木は自殺したろう。この問いは二人の友だち（*管〔秋骨〕・岸本〔藤村〕）が答えようとして答えることのできないものであった。世間ではいろいろ言い触らした。「食えなくて死んだんじゃないか」というものもあれば，「厭世だろう」と言うものもあり，「芸術の上の絶望からだ」と解釈するものもある。これと言って死因と認むべきものは，二人の友だちにすら見当たらなかったのである。「なぜ青木君は亡くなったんでしょう。」と岸本は未亡人にそれを尋ねて見た。「さあ，わたしにもわかりません。」こう未亡人が答えた。この『わたしにもわかりません』が一番正直な答えらしく聞こえた。…〉（前掲『春』）

㉑除籍簿［小田原市役所］に〈明治廿七年六月十五日相続〉とある。

㉒〈…この頃から発つた夫の狂熱の発作と家計の不如意，そのうへに愛児の養育，姫さまそだちのまだ世慣れない美那子にはこれだけでも非常なのであつたのに，更に透谷氏の死に遭つたのだから喪心するより外なかつたのである。半夜すやすやと眠れる愛児の顔を眺めてゐると，心は遠いところへ誘はれて，はてしなく涙が流れたが，いつまでかうしてはゐられない。遂に英子は透谷氏の父母にあづけ，自分は身一つになつて独立することにした。そして米国宣教師ウードウオルス氏の斡旋で，その夫人の姉なるペンロード女史の日本語の教師となり，月十円の報酬を得て，自活の道も立つと同時に英語も習ふことができた。…〉（X生編『新しき女』T２）

明治22年初対面以来，透谷と成明の二人は〈相済ふに道を以てし，相孚するに心を以てし，窮乏には相救ひ，長は押し短は違て其堅き金石の如く，其臭ひ蘭の如し〉（前掲「月下恋を読みて」）という厚い友情で結ばれ，透谷の没後も美那子と英に受け継がれた。あたたかい交流は命のある間つづく。

成明の略歴を記した１枚の草稿（著者，執筆年月とも不明）［青山学院史料センター］にも愛すべき〈侠骨〉があらわれている。

〈先生は温厚にして多趣味，謡曲に篆刻に書に文学に行く所として可ならざるはなく，教室にあってもシエクスピアを漢訳したり竹外の詩を英訳したりして講義された。先生の広い智識と明るい授業とは生徒の心を明るくしてくれた。先生は奥州釜の子陣屋（*現・福島県西白河郡東村）に生れ（*越後高田藩士・櫻井鋹弥とせつの長男）東京大学文学部（※古典講習科漢書課）を卒業（*明治21年）し宣教師（*カナダメソジスト教会 Charles Samuel Eby 1845～1925）の業を助け，一時関西学院（※M26. 9～M29. 1）・神戸女学院（※M26. 9～M29. 4）（※奈良県尋常中学校M29. 4～M31. 3）に教へたが明治三一十一年帰京して（*東京帝国大学文科大学助手・同附属図書館・同史料編纂掛兼勤のまま，M32. 3）青山に来られた。その後三十四年間倦く事なく教壇に立ち学院の教育に尽された。昭和八年に退職され世田谷に自適の余生を送られ，昭和二十年四月十二

日敵機の空襲の中に世を逝られた。〉「※」は「櫻井成明履歴書」[東京大学附属図書館・東京都公文書館・青山学院史料センター] より

櫻井成明古稀の集い（昭和9年11月3日，世田谷上馬の櫻井宅にて）
後列左から2人目・櫻井まつ子様　前列右端・北村美那子（美那子の後ろは故櫻井成廣氏），3人目・成明

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

●本稿は1999年6月5日「透谷・一葉研究会」（早稲田大学小野講堂）で発表したものに一部訂正を加えた。

○書簡の解読にあたり，書家・野平寿子氏（西谷博之氏の紹介による）と埼玉県立文書館・新井浩文氏のご指導を仰いだ。
○故茂木宏，片倉進ご両氏と，青山学院資料センター，聖学院大学総合図書館，東京都公文書館，東京都立中央図書館，早稲田大学図書館各機関からは，貴重な資料をご提供いただいた。
○小澤勝美『北村透谷—原像と水脈』S57，色川大吉『北村透谷』H6，江刺昭子『透谷の妻—石阪美那子の生涯』H7，平岡敏夫『北村透谷研究・評伝』H7，「北村美那子参考文献」鈴木一正『時空No. 7』H7からは大きな恵みを受けた。
○平岡敏夫先生はじめ，小澤勝美，川合道雄，黒木章，佐藤善也，清水均，鈴木一正，永渕朋枝，西谷博之，橋詰静子，槇林滉二，藪禎子諸先生からは懇切なご教示をいただいた。
　こころからの感謝を捧げたい。